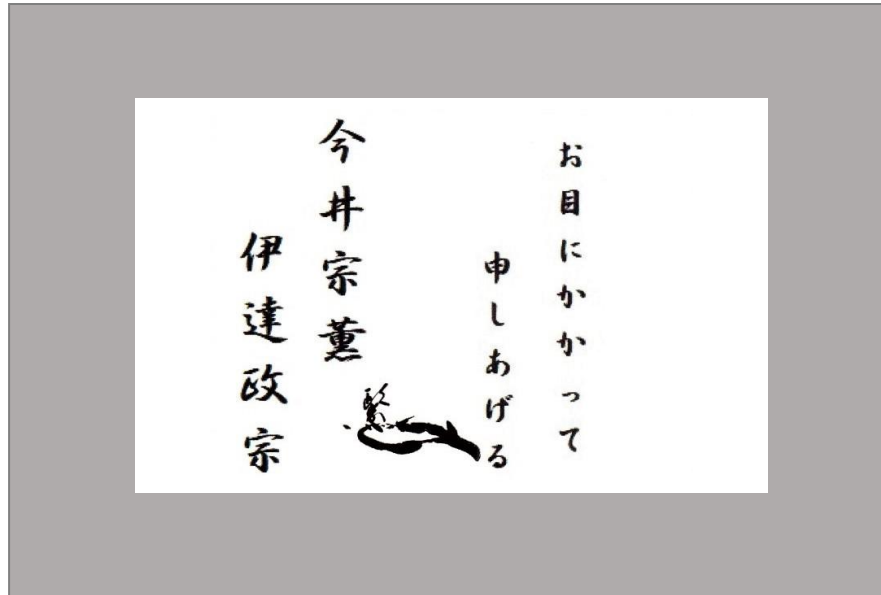


「堺・仙台文化交流」

仙台城主・伊達政宗公から堺の茶人・今井宗薫宛の書状

展示書状解説 (デフォルメ版)



個人所蔵

〔伊達政宗書状解説〕

文禄2年(1593)朝鮮出兵の際、豪華できらびやかな戦装束が評判になり「伊達男」の勇名を馳せるなど伊達政宗の派手好きは、時の天下人・豊臣秀吉の派手好きにも和して気に入られました。

反面、料理をこなす「おもてなし」大名でもあり、手紙も流麗達筆でマメに書くなど几帳面な性格の持ち主だったそうです。

伊達政宗が生涯に書き残した手紙は多く、徳川家康の側近的な地位にあった大老・土井利勝に宛てた79通を筆頭に、今井宗薫に宛てた手紙の数は32通もあり(第5位)、上位者の中では唯一の商人出身旗本でした。伊達政宗ほどの大大名でも今井宗薫を介さねば徳川家康に上申できませんでした。

小田原城での初対面以来、関ヶ原の戦い前後にかけて伊達政宗と今井宗薫との手紙の交換は25通が知られ、その内訳は、今井宗薫⇒伊達政宗：10通、伊達政宗⇒今井宗薫：15通でした〔注1〕。

伊達政宗は、大名や公家宛の書状には鶴鴿(セキレイ)の花押を用い、親族・家臣・私用には大きな丸味のある花押を使い厳密に分けていました。

本書状は、「相談があるから来てほしい」という簡単な内容ですが、自筆で鶴鴿の花押まで書し、しかも第三者からは内容不明であることに注目しますと、用件は大事につきお会いして相談したいとも読み取れ、伊達政宗と今井宗薫の親密な関係性がうかがえます。

関ヶ原の戦い後の手紙の交換が多いのが特徴的で、その中には、伊達政宗から戦勝の論功行賞として仙台城築城許可願いなどもあったことが推察されます。

文責：前田秀一(堺すずめ踊り協賛会)

〔注1〕 高橋あけみ 2003「今井宗薫と伊達政宗—宗薫家茶の湯書(佐藤家本)の意義」